

# ヴァージニア・ウルフの『燈台へ』に見る小説技法としての 「円環」について

濱西和子

## 1. はじめに

円環以上に《完成した》形は存在しない。またこれほど持続的な形もほかに存在しない。ユークリッドが記述している円環と現代数学が描きだすそれとは、たんに似ているだけでなく、合致している。時計の文字盤、運命の車輪といったものは、それらが記録し、あるいは決定してゆくさまざまな変化によって修正されることなく、損われることなく、時間を貫通している。精神は、ひろがり表現しようとするときには必ず、同じ中心点のまわりに同じような曲線をうごかしてゆく。コンパスの脚のひらき具合はいろいろあるにしても、あらゆる時代の人間はじつにただひとつのコンパスしか使用していないのだ。

したがって円環という形は、それによってわれわれが自分たち自身のいる精神的ないし現実的な場所を描き出し、われわれをとり巻いているもの、ないしはわれわれ自身がとり巻いているものを位置づけることができるようになる種々の形のうちで、もっとも恒常的なものである。その簡潔さ、その完璧さ、その絶えざる普遍的な適応のゆえに、円環は、あらゆる信仰の根底に見出される種々の特権的な形象のうちで、もっとも重要なものとされている。P.5 (註1)

ジョルジュ・ブーレ(註2)が定義しているように《円環》はまさに人間にとって根源的、かつ普遍的な課題であり、宗教、神話、また文化人類学など多方面にわたる側面から扱われてきた。

《円環》を小説の中に一つの技法として導入した顕著な例は、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』に見られるが、ヴァージニア・ウルフの『燈台へ』では、海原の彼方に巖とした不動な姿として、またときには屋気楼のように揺らめいて存在する燈台は、人々が容易にたどり着くことが出来ない遠い距離と、それに伴う時間の実体を象徴するものとして設定されている。燈台という永遠に不動と思える象徴的なものを円の中心軸に据え、その円周上を経過する時間とともに、人々の老齡と死、物質の崩落と世代交替、幼き頃の原風景への回帰とウルフ特有なリリズムに満ちた散文詩の文体と卓越した比喩を駆使して語られていく。

ドラマティックな物語の展開があるわけではなく、登場人物や万物のすべてが内面描写で語られていく。波の波動や懐かしい香り、ささいな物音や亡き人が愛した物、風や光から走馬灯の如し蘇る過去の記憶と意識は、我々の知覚を通して、忘却の彼方から時空を超えて脳裏に浮かび上がってくる。ウルフが客観的描写に徹しながら、小説技法としての卓越した試みと、文体の美学を徹底して追求したことでウルフの作品の中でも『燈台』は傑出したものではなかろうか。

小説の構成は三部からなり、一部の「窓」で夏の海辺の別荘に集う登場人物達が、二部の「時はゆく」では、その後の10年後に設定され、時という風化と侵食に濾過され、消失した人々や老廃した別荘が淡々と描かれていく。三部の「燈台」では、再び別荘に集うラムゼイ家の人々と友人達。ついに長年の夢であった「燈台」行きが達成され、画家のリリーが10年の歳月を経て、中断していた絵の中にラムゼイ夫人の幻影を捉え、ついに絵を完成させてラムゼイ夫人の再生を果たす。ここで「燈台」と言う中心軸を基点に「円環」は達成される。

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』(註3)の最終章「見出された時」に見られるように、人間の五感の知覚を通して過去が現在に蘇える。すべての章がこの最終章に連結し、「円環」するように、ウルフも同様に小説の構成として、三部編成の中に時間経過というフィルターを透して、脈絡と続いていく生命の永遠性を「円環」という小説手法の中に追求したのではなかろうか。

## 2. 構成と舞台設定

この作品は三部から構成されている。

第1部「窓」,(約127頁),第一次大戦前の9月の中頃,午後から夜。

第2部「時はゆく」,(約18頁)第一次大戦をふくむ10年間

第3部「燈台」,(約67頁)その10年間がすぎた後の9月末のある日の朝から正午頃

舞台設定はスコットランドのヘブリディ - ズ緒島の中のスカイ島で、海を見下ろすラムゼイ家の古い別荘があり、遙か彼方にはこの小説の象徴的なテーマである燈台が見える。

## 3. あらすじ

第一部「窓」,は夕方から真夜中の晩餐会が終焉するまでの半日がゆっくりと語られていく。この作品の中心的主題である「燈台」を訪れることが計画されるが、雨のため中止され、幼いジェイムズが父親の頑な現実認識に対して怒りと反発を抱く場面から始まる。この小説の「円環」課題のように、最後の章でようやく目標である燈台行きが達成されるまで、背後に燈台を象徴的聳えさせながら物語は展開されていく。「窓」というタイトルから喚起されるように、登場人物同士がお互いの視点を通して見た客観印象が語られていく。特にこの部ではラムゼイ夫人の印象描写によって、登場人物像が浮かび上がってくる。また第四章ではリリーがラムゼイ氏とバンクス氏に対する印象が語られていく。これはウルフの手法によく用いられ方法であるが、鏡に映る姿を映すように両者に互いを描写させる手法である。

とりたてた筋があるわけでもなく、日常生活の流れがウルフの小説技法により一つの神話になる。大学教授のラムゼイ夫妻の別荘に知人が集い、これらの人物間の内部意識を語りながら、それぞれの像を立体的に浮かび上がらせていく。登場人物は厳格で気難しい哲学教授、優しく、万人の憧れの的である美しい夫人。8人の子供達、中国人のような目をした独身の画家リリー・ブリスコ、ラムゼイ氏の弟子である哲学者のタンズリ、詩人のカーマイケル氏、夕食に招待されているバンクス氏、ミンタとポールである。ラムゼイ夫人は繊細な息子の感受性を守ろうとするが、夫の弟子である皮肉なタンズリ氏に再度、天気悪さと燈台行き

が実現不可能なことを告げられる。

‘Yes, of course, if it’s fine to-morrow,’ said Mrs. Ramsay.

‘But you’ll have to be up with the lark,’ she added.

To her son these words conveyed an extraordinary joy, as if it were settled the expedition were bound to take place, and the wonder to which he had looked forward, for years and years it seemed, was, after a night’s darkness and a day’s sail, within touch. Since he belonged, even at the age of six, to that great clan which cannot keep this feeling separate from that, but must let future prospects, with their joys and sorrows, cloud what is actually at hand, since to such people even in earliest childhood any turn in the wheel of sensation has the power to crystallise and transfix the moment upon which its gloom or radiance rests, James Ramsay, sitting on the floor cutting out pictures from the illustrated catalogue of the Army and Navy Stores, endowed the picture of a refrigerator as his mother spoke with heavenly bliss. (『To the Lighthouse』 p.7)

(「ええ、きっと、あしたお天気だったら」とラムゼイ夫人は言って、それからつけ加えた。「でもうんと早起しなればね。雲雀と一緒にね。」)

息子はこの母親の言葉に、もう燈台行は決ったかのような喜びようであった。幾年月も期待して待った素晴らしいことは、一夜の闇と一日の船旅のあとに、すぐ手のとどくところまで来ていた。この子は六歳で世に多くいる感情家の仲間、この感情をあの感情からきりはなしておくことは出来なかった。未来の予想にまつわる喜びも悲しみも、現実の身近なものに影をおとした。この仲間のごく幼少の頃から、感覚の歯車の廻転が、輝きであれかげりであれ、その瞬間を結晶させてくぎづけにする力をもっているのである。

ジェイムズ・ラムゼイはゆかの上に坐って「陸海軍百貨店」の絵入りカタログから冷蔵庫を切りとっていたが、この母親の言葉はこの冷蔵庫に天来の至福の光りを与えた。(『燈台へ』 p.5)

‘But,’ said his father, stopping in front of the drawing-room window, ‘it won’t be fine.’ (Ibid., p.8)

(「しかし」客間の窓のまん前で足をとめて父親は言った。「あしたの天気はまずいぞ」)(Ibid., p.6)

Had there been an axe handy, a poker, or any weapon that would have gashed a hole in his father’s breast and killed him, there and then, James would have seized it (Ibid., p.8)

(もしあたりに手斧が、火かき棒が、何でもよい父親の胸にあなをぶちぬいて殺すことの出来るものがあつたなら、ジェイムズは、やにわに、それを掴んだであろう。)(Ibid., p.6)

What he said was true. It was always true. He was incapable of untruth; never tampered with a fact; never altered a disagreeable word to suit the pleasure or convenience of any mortal being, least of all of his own children, who, sprung from his loins, should be aware from childhood that life is difficult; (Ibid., p.8)

(おれの言うことは真実だ。いつでも真実なのさ。おれにはうそは言えない。事実をごまかすことは出来ない。どんな人間を喜ばすためにも、その人間の便宜のためにも、不愉快な言葉を変更することは出来ない。まし

てや自分の腰から生れた[旧約に使われている表現，創世記，列王紀等にあり]子供たちのためにそんなことをするのは，もってのほかのこと，子供たちには人生はむずかしいもの，事実は妥協のないものと，よく承知させておかねばならないのだ。) (Ibid., p.6)

ラムゼイ氏の性格と妻にたいする考えが次の文章から理解出来る。

There wasn't the slightest possible chance that they could go to the Lighthouse to-morrow, Mr. Ramsay snapped out irascibly.

How did he know? She asked. The wind often changed. The extraordinary irrationality of her remark, the folly of women's minds enraged him. He had ridden through the valley of death, been shattered and shivered; and now she flew in the face of facts, made his children hope what was utterly out of the question, in effect, told lies. (Ibid., p.37)

(明日燈台へなど絶対に行けないさ，ラムゼイ氏は憤然としてはきだすように言った。そんなことわかりませんわ，風向きはよくかわりますもの。

その言葉の途方もない不合理さが，女心の愚かしさが，腹立たしかった。おれは馬を駆って死の谷を越えてきた。うちひしがれて，ふるえおののいているのだ。それなのにあの女は事実にむかっていどみかかるのだ。おれの子供らに，全く問題にならぬことに期待をいだかせる。結果としては虚言をつくことになるのだ。) (Ibid., p.40)

'No, going to the Lighthouse, James,' he said, as he stood by the window, speaking awkwardly, but trying in deference to Mrs. Ramsay to soften his voice into some semblance of geniality at least.

Odious little man, thought Mrs. Ramsay, why go on saying that? (Ibid., p.19)

子供達に無神論者と馬鹿にされているタンズリに再度「燈台」行きが不可能なことを言われジェームズは更に落胆する。

(「燈台行はだめですね，ジェームズ」と窓の傍で，タンズリは無器用に声をかけたが，ラムゼイ夫人に敬意を表して，どうか親切と思える調子に声を柔らげた。憎たらしい小男，何故あのことをあんなに言いつづけるのだろう，と夫人は思った。) (Ibid., p.19)

'Perhaps you will wake up and find the sun shining and the birds singing,' she said compassionately, smoothing the little boy's hair, for her husband, with his caustic saying that it would not be fine, had dashed his spirits she could see. This going to the Lighthouse was a passion of his, she saw, and then, as if her husband had not said enough, with his caustic saying that it would not be fine to-morrow, this odious little man went and rubbed it in all over again. (Ibid., p.19)

(「目が覚めたら，お日さまがきらきら輝いて，鳥が啼いているかもしれないわ」おもいやり深く，少年の髪をなでながら，言った。主人の，天気の良いはずはないさ，というにべもない言葉がすっかり少年の意気をくじいていることがわかっていたから。それにこの燈台行は息子のまえまえからの熱望であった。ところで主人のあのにべもない，天気の良いはずはないさとの言葉が，充分ではないかのようにこの憎たらしい小男

は、わざわざくどくどと、くりかえすのである。) (Ibidp19)

ラムゼイ家の息子ジェームズの感受性の鋭さとラムゼイ夫人の息子に対する愛情と将来への配慮が次の文章で理解出来る。

But he kept looking back over his shoulder as Mildred carried him out, and she was certain that he was thinking, we are not going to the Lighthouse to-morrow; and she thought, he will remember that all his life. (Ibid., p.68)

(しかしミルドレッドにつれて行かれながら、頭をうしろに向けたまま、こちらを見ておりました。明日燈台へはゆかないと考えつづけていたにちがいないのです。そして彼は一生、そのことをおぼえているにちがいません。) (Ibid., p.79)

No, she thought, putting together some of the pictures he had cut out — a refrigerator, a mowing machine, a gentleman in evening dress — children never forget. For this reason, it was so important what one said, and what one did, (Ibid., p.69)

(そうよ、ジェームズが切り抜いた冷蔵庫、芝刈機、燕尾服着用の紳士、などを一緒にあつめながら私は考えました、子供は絶対に忘れないわ。それだから、言うこと、することには気をつけねばいけないのです。) (Ibid., p.80)

ラムゼイ夫人の「音」に関する感覚はとても繊細で、子供達の遊ぶ日常的な音に平穏さと幸福感を感じる

が、音を媒体とし意識が喚起され、波動の如く他の意識に転移してイメージが連鎖していく。

which had lasted now half an hour and had taken its place soothingly in the scale of sounds pressing on top of her, such as the tap of balls upon bats, the sharp, sudden bark now and then, 'How's that? How's that?' of the children playing cricket, had ceased; so that the monotonous fall of the waves on the beach, (Ibid., p.20)

(もうかれこれ半時間もつづいて、クリケットに興じる子供たちの、バットにあたる<sup>まじり</sup>音、時々「ハウズ・ザット、ハウズ・ザット？」[クリケットで審判者にアウトかどうかたしかめる言葉]という、不意におこる鋭いかげ声とともに、夫人の心に追いせまる、色々な音の音階の中に座をしめて、その心を鎮めていたのであったが、そのつづやきが急にやんでいたのであった。すると浜にうちよせる波の単調な音がきこえてきた。) (Ibid., p.20)

ラムゼイ夫人は、夫がテラスの上をテニスの詩を口ずさみながら歩く足音に心からの安堵感と、何も変化のない日常の自然なリズムの中で彼女の瞑想は自由に行き来する。

One moment more, with her head raised, she listened, as if she waited for some habitual sound, some regular mechanical sound; and then, hearing something rhythmical, half said, half chanted, beginning in the garden, as her husband beat up and down the terrace, something between a croak and a song, she was soothed once more, assured again that all was well, (Ibid., p.21)

(今一瞬の後には、頭を<sup>もた</sup>擡げて、耳をすまし、いつもきく音、何か規則正しい、機械的な音をまちかまえてい

るかのようであった。やがてリズムカルな、なかば語られ、なかば詠唱するような声が庭からきこえてきた。テラスを歩調をとって行きかえりしながら、夫の発するつぶやきとも歌ともつかぬ声であった。)

(Ibid., P.21)

寛容で豊かな心情のラムゼイ夫人だが、また時には生命の根幹をゆるがすような悲壮感が彼女の想いの中に漂い、複雑な多面的な性格も彼女の心情の中に読み取れる。

but like a ghostly roll of drums remorselessly beat the measure of life, made one think of the destruction of the island and its engulfment in the sea, and warned her whose day had slipped past in one quick doing after another that it was all ephemeral as a rainbow - this sound which had been obscured and concealed under the other sounds suddenly thundered hollow in her ears and made her look up with an impulse of terror. (Ibid., p.20)

(突如としておどろおどろのあやしい生命のしらべをうち、聞く者に島の滅亡を、海中への沈没を思わせ、彼女の命数は、またたくまに過ぎ行くいとなみにきえて、諸行は虹のごとくにはかないことをいましめる。この波の音が、他の音によわめられ、かくされていたこの音が、突然彼女の耳に虚ろにとどろき、彼女は恐怖の衝動で眼をあげた。) (Ibid., p.20-21)

ラムゼイ家に滞在し、窓辺に坐るラムゼイ夫人と息子ジェイムズをモデルに絵を描いているリリーの印象風景が語られていく。

Directly one looked up and saw them, what she called 'being in love' flooded them. They became part of that unreal but penetrating and exciting universe which is the world seen through the eyes of love. The sky stuck to them; the birds sang through them. And, what was even more exciting, she felt, too, as she saw Mr.Ramsay bearing down and retreating, and Mrs. Ramsay sitting with James in the window and the cloud moving and the tree bending, how life, from being made up of little separate incidents which one lived one by one, became curled and whole like a wave which bore one up with it and threw one down with it, there, with a dash on the beach.

(Ibid., p.53)

(ラムゼイ家の人々と暮す時には、そうしていないと、気持が宙にういてしまう。眼をあげてラムゼイ家の人々を見るや否や、私が「恋してる」という気配が溢れてくるのです。その人々は、現実ではないけれど、心にしみとおって、興奮を感じさせる小宇宙、それこそ、恋の目を通してみられる世界なのですが、その世界の一部になってしまうのです。空は人々と不可分となり、鳥は人々を通して歌うのです。なお一層、心を動かすことは、襲いかかるようにあらわれ、また退却してゆくラムゼイ氏を、窓辺にジェイムズと一緒に腰をおろしているラムゼイ夫人を、行く雲、たわむ樹を、眺めていますと、人生をなりたたせている小さな、はなればなれの出来事、それを人は一つ一つ、順次に、経験してゆくものなのですけれど、その人生がまるで波のように、一体となって捲き上げ、人を運び上げたと思うと、岸にどうとぶちつけて、人を投げおろすように感じられるのです。) (Ibid., p 59-60)

夕刻、庭を背景に窓辺に坐る母子(ラムゼイ夫人とジェイムズ)を描くリリー、晚餐会のビーフ・シチュ

ーは見事に出来上がり，夕食に遅れてきた若いミンタと恋人は婚約したことを知る。夕食会は大成功で，「どんなに長く生きようとも、きっと今晚のこと、この月のこと、風のこと、家のこと、そうして私のことも、思い出してくれるだろう。」(Ibid., p.148)と自分の勝利を確信する。ラムゼイ氏の若い時からの友人であり，妻に先き立たれた植物学者であるバンクス氏，それと詩人のカーマイクル氏，彼はいつも阿片を常習していて，人生の落伍者とみられているが後に詩集を出版してその存在感を示す。

He said nothing. He took opium. The children said he had stained his beard yellow with it. Perhaps. What was obvious to her was that the poor man was unhappy, came to them every year as an escape; and yet every year, she felt the same thing; he did not trust her. She said, 'I am going to the town. Shall I get you stamps, paper, tobacco?' and she felt him wince. He did not trust her. (Ibid., p.46)

(カーマイクルさんは何とも答えません。あの人は阿片を常用しています。子供らの言うところでは、あの人のあご鬚が黄色にそまっているのはそのせいなのだそうです。多分そうでしょう。私にはっきりわかることは、あのお気の毒な人はふしあわせだということです。私どもの所へ毎年みえるのも、それからの逃避だと思います。それなのに毎年私の感じることはあの人を信用していないということです。) (Ibid., p.51)

登場人物の詩人カーマイクル氏は，世俗的な意味では人生の敗北者である。大学を追われ，不幸な結婚に悩み，経済的に困窮して麻薬の常習者であるが，この作品の最後の章で独特の風格と成功で登場人物としてのある種の役割を演じる。これらの登場人物はラムゼイ夫人の意識を通して語られていくが，また彼女に対応してリリーの目を通して登場人物の性格や彼らの人生が語られていく。これらの人々の別荘での夕食会のあと，「燈台」行きは果たされず夜がふける。

リリズムにみちた詩的な散文体でラムゼイ夫人の心象風景が，彼女の独白（モノローグ）で語られていく。夜のとばりがあり，あらゆるものは眠りの世界に入る。この世のすべてのものが宇宙のなかに静かに溶け込んでいく。深い闇の中から聞こえてくる物音はラムゼイ夫人の死を予期しているように思える。

Always, Mrs.Ramsay felt, one helped oneself out of solitude reluctantly by laying hold of some little odd or end, some sound, some sight. She listened, but it was all very still; cricket was over; the children were in their baths; there was only the sound of the sea. She stopped knitting; she held the long reddish-brown stocking dangling in her hands a moment. She saw the light again. With some irony in her interrogation, for when one woke at all, one's relations changed, she looked at the steady light, the pitiless, the remorseless, which was so much her, yet so little her, which had her at its back and call (she woke in the night and saw it bent across their bed, stroking the floor), but for all that she thought, watching it with fascination, hypnotised, as if it were stroking with its silver fingers some sealed vessel in her brain whose bursting would flood her with delight, she had known happiness, exquisite happiness, intense happiness, and it silvered the rough waves a little more brightly, as daylight faded, and the blue went out of the sea and it rolled in waves of pure lemon which curved and swelled and broke upon the beach and the ecstasy burst in her eyes and waves

of pure delight raced over the floor of her mind and she felt, It is enough! It is enough! (Ibid., p.71-72)

(自分を独り居の物思いから、現実にはひきもどすのは何かつまらない、ちょっとした音とか、光景とかがきっかけになるものなのかわ、ラムゼイ夫人はそう思った。耳をこらしたが、あたりはすっかり静かになっていた。クリケットは終わっていたし、小さな子供らは浴室にいて、きこえるものと言えば海の音ばかり。編むのを止めて、長い赤茶色の靴下を、一瞬手にぶらさげた。燈台の光が、また、眼にはいった。我に帰った自分と、燈台とのかけ合いは、全く変わってしまったのであろうかと、うたがい、何となく皮肉な気持ちである着実な第三の光帯、無慈悲な、容赦のない光に眼をむけた。あれほどに自分と同一のものと感じられたのであったが、しかも今は自分とは遠くかけはなれたもので、私に指図して意のままに動かした。(夜中に目覚めた私は私たちの寝台に弓なりに光をあててから、<sup>ゆか</sup>床を這ってゆく光を見ました)しかし、そうはいうものの、私はまるで睡眠術にかけられたかのように、その光帯を見守らずにはいらませんでした。まるで私の脳髄に秘めとざされた<sup>うつわ</sup>器を、光帯の銀色の指が撫でさすっているかのようでした。その器がぱっと開いた時には、私は歓喜の洪水におぼれてしまうことでしょうか。見守りながら私は考えました。私は幸福を、いみじき幸福を、強烈な幸福を、知りえたのだと。光帯は、夕陽がうすれるにつれて、波立つ海を、銀色にかがやかした。海からは青色が消えてゆき、純粋なレモン色の波となって、浜辺にうねりとなってうちよせ、もり上り、やがてくれた。夫人の眼には恍惚の色が溢れ、まじりけのない喜びの波が心の奥を走りまわり、彼女は、もうこれ以上はいらない! 充分だ! と感じた。) (Ibid., P.83-84)

第二部「時はゆく」では、10年間の歳月が淡々とスピーディに語られていく。この章では、ラムゼイ夫人とその長女ブルーがお産で亡くなり、また第一次大戦に出兵した、将来有望とされていた数学者の長男が戦死する。おもに人々の死とラムゼイ家の変化や衰退が描かれていく。10年の歳月は同時に時間的な経過による、生命の衰退、状況の変化を伴い、3章の生命の再生と燈台行きの実現で「円環」へと連なるための小説構成としては、二部は必要な序章である。十年の歳月が過ぎ、この別荘はマクナブ婆さんが言う如し、今や荒廃したまま放置された廃墟である。ここでラムゼイ夫人やリリーに代わってマクナブ婆さんが時代の証人となり、ありし日のラムゼイ夫人を忘却の彼方から生きがえさせて、彼女の語りにより、読者は別荘の荒廃ぶりを見捨てられた廃墟の侘しさを想像させられる。

この章では登場人物の直接描写はなく、括弧付きで淡々とラムゼイ家の人々の死が語られていく。

[Prue Ramsay, leaning on her father's arm, was given in marriage that May. What, people said, could have been more fitting? And, they added, how beautiful she looked!] (Ibid., p.143)

([ブルー・ラムゼイは、父の腕によりそい、その年の五月に新郎に引きわたされた。人々は、これ以上お似合いの夫婦があるかと噂し、花嫁がどんなに美しかったかを語り合った。]) p・174

[Prue Ramsay died that summer in some illness connected with childbirth, which was indeed a tragedy, people said. They said nobody deserved happiness more.] (Ibid., p.144)



( [ブルー・ラムゼイはその夏、お産にかかわる病気のため死亡した。人々はまことに悲しい事と、彼女ほど幸福にふさわしい人はいないのにと、嘆いた。] ) (Ibid., p.175)

[Mr.Ramsay stumbling along a passage stretched his arms out one dark morning, but, Mrs.Ramsay having died rather suddenly the night before, he stretched his arms out. They remained empty.] (Ibid., p.140)

( [ラムゼイ氏は、朝まだほのぐらい時、廊下をよろめき通りながら、両腕をさしのべた。しかし、ラムゼイ夫人は前の晩、突然死んでいたもので、さしのべられた腕はいつまでも、むなしくからのままであった。] ) (Ibid., p.169)

突如、この別荘に生命が再び吹き込まれる。

All of a sudden, would Mrs. McNab see that the house was ready, one of the young ladies wrote: would she get this done; would she get that done; all in a hurry. They might be coming for the summer, had left everything to the last; expected to find things as they had left them. Slowly and painfully, with broom and pail, mopping, scouring, Mrs. McNab, Mrs. Bast stayed the corruption and the rot; rescued from the pool of Time that was fast closing over them now a basin, now a cupboard; (Ibid., p.151-152)

(突然、ラムゼイ家の娘さんの一人が手紙をよこした。マクナブおばさん、あの家に住めるよう用意しておいて下さいませんか、これをしておいて下さいませんか、あれをしておいて下さいませんか、すべていそいでいただきたいのです。あの人たちはこの夏、来るかも知れない。何もかも、とことんまで放っておいて。すべてが残して行った時のままであるような心算なんだから。ゆっくりと痛みをこらえて、箒と桶をもって来て、モップで拭き、こすりみがいて、マクナブ老婆とバスト老婆は、腐敗と老朽を食いとめ、今にも鉢を戸棚を掩いつくそうとした、時という池から救い出したのだ。) (Ibid., p.184)

第三部「燈台」では、十年後、荒廃したかつての別荘に人々が戻ってくる。

ラムゼイ氏は71歳になり、ジエイムズとカムは16歳と17歳になり、画家のリリーと詩人として成功したカーマイケル氏である。10年振りにこの別荘に戻ってきたリリーが長い間中断していたラムゼイ母子の絵を描き上げるのと同時に、ラムゼイ氏とジエイムズとカムが初めて燈台行きの船旅に出かける場面が平行して描かれる。今回は燈台への船旅を希望するのは息子ジエイムズではなく、ラムゼイ氏自身であり、亡き妻を供養し死者を偲ぶためである。

この章では絵を完成させようとしているリリーと、同時に小船で燈台に向かうラムゼイ家の人々が平行して語られていく。肖像画のラムゼイ夫人の再生と燈台行きの達成が「円環」の中心で合一されたものとなる。

10年振りで別荘を訪れたリリーは、ラムゼイ夫人の死による消失感を強く感じ、「中心を完全な空白」(a centre of complete emptiness) と述べている。現実にはラムゼイ夫人の坐っていた客間の前の石段は空っぽなのだが、リリーのイメージの中には「紫色の三角形」としてジエイムズに本を読んでいる姿が今でも浮かんでくる。リリーは死者に対する呼びかけを繰り返す「生の意味とは」(What is the meaning of life?)、それに応じるようにラムゼイ夫人は再生してくる。

それと同時に小船が燈台に近着きつつある。過去と現在，死者と生者とが時空を超えて交錯する，それをリリーの目を通して追体験するのは我々読者自身である。リリーの過去の回想と意識の叙述がこの章の中心となる。リリーの匂いや月の光から喚起される過去の記憶と意識。

the taste and smell that places have after long absence possessing her, the candles wavering in her eyes, she had lost herself and gone under. It was a wonderful night, starlit; the waves sounded as they went upstairs; the moon surprised them, enormous, pale, as they passed the staircase window. She had slept at once. (Ibid., p.163)

(久しぶりにおとずれたこの家の味と匂いは，リリーの心を奪い，ろうそくの光は目にちらちらちらついて，気が遠くなった。星のまたたく，素晴らしい夜であった。二階の寝室に行くとき，波のひびきがきこえた。月は，階段の窓を過ぎるときみんながびっくりしたほど，巨大で青白かった。リリーはすぐに寝入った。) (Ibid., p.198)

for she could not, this first morning with the Ramsays, contract her feelings, could only make a phrase resound to cover the blankness of her mind until these vapours had shrunk. For really, what did she feel, come back after all these years and Mrs. Ramsay dead? Nothing, nothing-nothing that she could express at all. (Ibid., p.159)

(ラムゼイ一家との最初の朝である今，また自分の感情ははっきりしたまとまりをもたず，ただ一つの文句で，このもやもやとしたものがおさまるまで，自分の心の空虚を反響させているのに過ぎないのだ。事実，この永い年月をへて，それにラムゼイ夫人が亡くなってしまった後にここに帰って来て，一体自分は何を感じているのか？ 全く何も，何も，いやしくも言葉で表現出来るものは何も感じてはいない。(Ibid., p.193)

リリーはラムゼイ夫人の不在を強く意識する。

Mrs. Ramsay had given. Giving, giving, giving, she had died and had left all this. Really, she was angry with Mrs. Ramsay. With the brush slightly trembling in her fingers she looked at the hedge, the step, the wall. It was all Mrs. Ramsay's doing. She was dead. Here was Lily, at forty-four, wasting her time, unable to do a thing, standing there, playing at painting, playing at the one thing one did not play at, and it was all Mrs. Ramsay's fault. She was dead. The step where she used to sit was empty. She was dead. (Ibid., p.163-164)

(ラムゼイ夫人も与え通して来た方。与えて，与えて，与えて，亡くなられたのだわ。真実，リリーはラムゼイ夫人に腹をたてていた。指の中で刷毛をふるわせながら，生垣を見，ふみ段を見，壁を見た。これはみんなあの方のせいなのだわ，亡くなってしまって。四十四歳になって私は何にも出来ないで時間をむだにしているの，ここに立って，絵を描くことをもてあそんでいるのだわ。真剣にとりくんだ唯一のことだったのに。あの方のせいよ，亡くなってしまって。いつも腰をおろしていらしたふみ段はからっぽ。亡くなってしまって。) (Ibid., p.199)

It was some such feeling of completeness perhaps which, ten years ago, standing almost where she stood now, had made her say that she must be in love with the place. Love had a thousand shapes. There might be lovers whose gift it

was to choose out the elements of things and place them together and so, giving them a wholeness not theirs in life, make of some scene, or meeting of people (all now gone and separate), one of those globed compacted things over which thought lingers, and love plays. (Ibid., p.208-209)

(それは多分、何かそのような十全性の感じのせいだったと思うのです、十年前に、自分の今立っている殆ど同じ場所に立って、私はこの場所を恋しているに違いないと、自分に言わせたものは。恋には色々な形があるものです。こんな恋人があってもいいのではないかと思います、たとえば、その人の才能は、物の本質を選び出してそれを一緒にすることなのです、そうして、生きている時はその人たちのものでなかった完全性を与え、ある場面、或いは人々の会合(今はみんな散りぢりに去って行った人々)から、ぎっしりと密度のある球状のものを作り出し、その上に思考をさまよわせ、恋を遊ばせるのです。(Ibid., p.255-256)

かつての登場人物達の年月を経て変化した社会的状況を語る。

he was growing famous. People said that his poetry was 'so beautiful.' They went and published things he had written forty years ago. There was a famous man now called Carmichael, she smiled, thinking how many shapes one person might wear, how he was that in the newspapers, but here the same as he had always been. He looked the same - greyer, rather. (Ibid., p.210)

(彼が有名になったことを思い出した。世間では彼の詩を「とても美しい」といってます。四十年も前に書いたものまで態々<sup>わざわざ</sup>出版したりして、今ではカーマイケルとよばれる有名人がいるのだわ、リリーは微笑んで、人間って一体いくつの形を身につけられるのかしらと考えた。あの新聞でもてはやされる彼と、ここにいる昔ながらの彼。全く同じ、ただどちらかといえば白髪がふえただけです。(Ibid., p.258)

かつての貧しい境遇のタンズリ氏は、今や学問の世界で地位をえて講演をする身分になっている。

Charles Tansley did that too: it was part of the reason why one disliked him. He upset the proportions of one's world. And what had happened to him, she wondered, idly stirring the plantains with her brush. He had got his fellowship. He had married; he lived at Golders Green.

.....

and making it his business to tell her women can't write, women can't paint, not so much that he believed it, as that for some odd reason he wished it? There he was, lean and red and raucous, preaching love from a platform (there were ants crawling about among the plantains which she disturbed with her brush - red, energetic ants, rather like Charles Tansley) (Ibid., p.213)

(チャールズ・タンズリも同じようなことをしたものです。あの人の嫌われる理由のなかばはそれです。人の世界の平衡をくつがえすのです。それにしても、あの人の身の上には何がおこったかしら、リリーは意味もなくおおばこを刷毛でつつきまわしながら考えた。あの人は特別研究員となり、結婚して、ゴールドズ・グリーン[ロンドン郊外]に住んでいる。..... まるでそれが自分の仕事でもあるかのように、女にはものは書けませんか、絵は描けませんよと、それを自分がそう信じていたからというよりは、何かおかしな理由で、そうあってほしいと望んでいる故に、私にそう言いつづけていたあの人に、ほんとに同胞なんて愛せる

のかしら？ そこに、痩せこけて、赤ら顔で、しゃがれ声のあの人が演壇から愛を説いていたのです)

(Ibid., p.261)

一方、リリーは海の彼方の燈台に意識が遷る。

‘He must have reached it,’ said Lily Briscoe aloud, feeling suddenly completely tired out. For the Lighthouse had become almost invisible, had melted away into a blue haze, and the effort of looking at it and the effort of thinking of him landing there, which both seemed to be one and the same effort, had stretched her body and mind to the utmost. Ah, but she was relieved. What-ever she had wanted to give him, when he left her that morning, she had given him at last.

(Ibid., p.225)

(「あの方は着かれたにちがいない」とリリー・ブリスコは声に出して言い、不意に、疲れ果てたように感じた。燈台はほとんど見えなくなり、青い霧<sup>もや</sup>の中に溶けてしまっていた。燈台を眺める努力と、そこに上陸する彼のことを考える努力は、二つながら、一つの、同じ努力のように思え、リリーのからだを心を極度に緊張させた。ああ、でも、ほんとにほっとしました。あの方に、今朝、差し上げようと思ったものが、何であろうと、とうとう上げてしまいました。) (Ibid., p.275-276)

そしていまや七十一歳に達したラムゼイ氏と成人したジェームズとカムがついに燈台に到達する。しかし、幼い頃、いつも憧れ眺めていた「燈台」と大人になってからみた実際の燈台の落差が露わになり落胆する。

‘It will rain,’ he remembered his father saying ‘You won’t be able to go to the Lighthouse.’ The Lighthouse was then a silvery, misty-looking tower with a yellow eye that opened suddenly and softly in the evening. Now-

James looked at the Lighthouse. He could see the white-washed rocks; the tower, stark and straight; he could see that it was barred with black and white; he could see windows in it; he could even see washing spread on the rocks to dry. So that was the Lighthouse, was it?

No, the other was also the Lighthouse. For nothing was simply one thing. The other was the Lighthouse too. It was sometimes hardly to be seen across the bay. In the evening one looked up and saw the eye opening and shutting and the light seemed to reach them in that airy sunny garden where they sat. (Ibid., p.201-202)

(「雨だよ、燈台に行けっこないよ。」父が言っているのを思い出した。

その頃、燈台は銀色の、霧のような塔で、夕方になると黄色い眼を、不意に、やさしくみひらいたものだ、そこで今は

ジェームズは燈台に眼をやった。白く塗られた岩、きびしく、真直ぐにつたつた塔、それが黒と白のんだら染めであるのがわかった。窓が見えた。洗濯物がかわかすために岩の上に拵げられているのさえも見ることが出来た。なるほどあれが燈台なのだ、そうだろう？

いや、燈台にはもう一つの顔がある。単純に一つのものであるものは何もない。今一つの方も燈台である。それは時には、入江を見渡して、ほとんど目に入らないこともあった。夜になって、見上げると、眼をあげたりしめたりして、その光はあの風通しのよい、陽気な庭、みんなで坐っていたその庭まで、さして来るように思えた。) (Ibid., p.247)

Indeed they were very close to the Lighthouse now. There it loomed up, stark and straight, glaring white and black,

and one could see the waves breaking in white splinters like smashed glass upon the rocks. One could see lines and creases in the rocks. One could see the windows clearly; a dab of white on one of them, and a little tuft of green on the rock. A man had come out and looked at them through a glass and gone in again. So it was like that, James thought, the Lighthouse one had seen across the bay all these years; it was a stark tower on a bare rock. It satisfied him. It confirmed some obscure feeling of his about his own character. The old ladies, he thought, thinking of the garden at home, went dragging their chairs about on the lawn. Old Mrs. Beckwith, for example, was always saying how nice it was and how sweet it was and how they ought to be so proud and they ought to be so happy, but as a matter of fact James thought, looking at the Lighthouse stood there on its rock, it's like that. (Ibid., p.219-220)

(そういえば、もう燈台は大へん近くになった。すぐそこにきびしく、屹立して白と黒にぎらぎらとしながら、姿を浮び上らせていた。波が岩にあたって、粉みじんにくだけた硝子のように白いしぶきをあげていた。岩の上には線やひだが見えた。窓もはっきり見えた。窓の一つに白いペンキが一はけぺたんとしていた。岩の上には草が一むれみえた。男が出て来て、望遠鏡をみんなにあててから、また中へ入った。この永い年月、入江のはてに望み見ていた燈台は、あのようなものだったのか、とジェームズは考えた、はだかの岩の上に巖然とたつ塔、それは彼を満足させた。それは、自分自身の特質についてのぼんやりとした感情をはっきりさせてくれた。老婦人たちは、芝生の上に椅子をひきずりまわしているだろうな、家の庭の事に思いをはせながら、ジェームズは考えた、) (Ibid., p.269-270)

またこの章のクライマックスである。リーリーが長年中断していた未完成の絵を前に、彼女の意識が一方では遙か彼方の燈台に向かい、他方は画面にひきよせられていくようにも感じ、そこで彼女はある奇跡に捉えられ窓辺の微かな光の中にラムゼイ夫人が再現し、ついに絵の構図をとらえ完成する。

why was it so short, why was it so inexplicable, said it with violence, as two fully equipped human beings from whom nothing should be hid might speak, then, beauty would roll itself up; the space would fill; those empty flourishes would form into shape; if they shouted loud enough Mrs. Ramsay would return. 'Mrs. Ramsay!' she said aloud, 'Mrs. Ramsay!' The tears ran down her face. p.195-196

(人生は何故そのように短く、何故そのように、説明しがたいものであるか、二人の、心の準備の充分に出来た人間として、この人たちからは何事もかくすことの出来ぬ、そんな人のように言葉はげしく追求したならば、美が姿をあらわし、空白はみたされ、またあの空白をとりまく唐草模様の飾りも形をもってくるでしょう。もし二人でカーぱい叫んだら、ラムゼイ夫人は帰って来るでしょう。「ラムゼイ夫人！」リーリーは大声で叫んだ。[ラムゼイ夫人！]涙は顔を流れおちた。) (Ibid., p.239)

Suddenly the window at which she was looking was whitened by some light stuff behind it. At last then somebody had come into the drawing-room; somebody was sitting in the chair. For Heaven's sake, she prayed, let them sit still there and not come floundering out to talk to her. Mercifully, whoever it was stayed still inside; had settled by some stroke of luck so as to throw an odd-shaped triangular shadow over the step. It altered the composition of the picture a

little. (Ibid., p.218)

( 突然、リリーが眼を向けていた窓が、うしろにある何か白く軽やかなもので白くなった。とうとう、それでは、誰かが客間に入って来たのだわ、誰か椅子に腰かけているわ。どうぞ神様、あそこにじっと坐らせて、まごまごと外へ出て来て、私に話しかけたりすることのありませんように。有難いことに、それが誰であろうと、部屋の中にじっとしています。幸運なことには、その奇妙な形をした三角の影が上り段の上におちるような位置に落ち着きました。あれで絵の構図が少しかわります。) (Ibid., p.267)

Ah, but what had happened? Some wave of white went over the window pane. The air must have stirred some flounce in the room. Her heart leapt at her and seized her and tortured her.

‘Mrs.Ramsay! Mrs.Ramsay! she cried, feeling the old horror come back - to want and want and not to have. Could she inflict that still? And then, quietly, as if she refrained, that too became part of ordinary experience, was on a level with the chair, with the table. Mrs. Ramsay —it was part of her perfect goodness to Lily —sat there quite simply, in the chair, flicked her needles to and fro, knitted her reddish brown stocking, cast her shadow on the step. There she sat. (Ibid., p.218-219)

(しかし、何が起ったのでしょうか？何か白い波のようなものが、窓硝子の上をよぎりました。風が部屋の中の飾りを揺り動かしたにちがひありません。夫人の心臓は私にとびかかり、私をとらえて、苦しめます。[ラムゼイ夫人！ラムゼイ夫人！]とリリーは叫び、あの昔のおそれが帰ってきたのを感じた あの求めに求めて、しかも与えられぬというあのおそれが。夫人はまだあのおそれを与えることができるのか？ そうして、それから、静かに、まるで夫人が遠慮したかのように、その恐怖もまた普通経験の一部になり、椅子とまたテーブルと同列となった。ラムゼイ夫人は リリーに対する厚情の一部なのだが、そこに、椅子に、至極尋常に腰をおろし、編針をあちこちとひらめかして、彼女の赤茶色の靴下を編み、上り段にその影をおとした。そこに腰をおろしていたのである。) (Ibid., p.268)

Quickly, as if she were recalled by something over there, she turned to her canvas. There it was—her picture. Yes, with all its greens and blues, its lines running up and across, its attempt at something. It would be hung in the attics, she thought; it would be destroyed. But what did that matter? She asked herself, taking up her brush again. She looked at the steps; they were empty; she looked at her canvas; it was blurred. With a sudden intensity, as if she saw it clear for a second, she drew a line there, in the centre. It was done; it was finished. Yes, she thought, laying down her brush in extreme fatigue, I have had my vision. (Ibid., p.225-226)

(急に、その向うの何物かに呼びもどされたように、リリーはキャンバスにふり向いた。ああ、そこにあったわ、私の絵が。そう、緑や青、上に走る線、横に走る線、あの絵は何かをこころみているのです。屋根部屋にかけられるかもしれません。棄てられてしまうかもしれません。しかしそんなことは何でしょう、と自分に言って刷毛をとり上げた。上り段を見た、空だった。キャンバスを見た、ぼんやりとしていた。不意に一種、はげしい感情にかられた、一つの線を真中にひいた。出来た、完成した、とリリーは考えた、極度の疲労で刷毛をおいた、そうよ、わたしは構想<sup>ヴィジョン</sup>をとらえました。) (Ibid., p.276-277)

#### 4．時間経過

物語の展開と時間の経過は表裏一体であり、物語が進行するにつれて、時間も同時に経過していく。しかし、ウルフやブルーストはこのクロノジカルな物理的な時間経過の原則に従わず、あくまでも彼ら独自の小説手法で内的時間の追求を試みた。記憶や忘却、過去と未来が現在の中に同時に混在しているという主張のもとに、「燈台」の中の登場人物の死という自然消失、老熟という容貌の衰えなど時間の経過に伴う、否応の無い変化。また十年振りに訪れた別荘は昔の面影はなく、無残にもいたるところ雨風にさらされて崩壊寸前である。時間は人間の肉体や彼らを取り巻く社会的状況をことごとく変えていく。また物質も情け容赦なく崩落していく。この外面的時間に反して、内面的時間は、ひとびとの記憶の中に蘇えり、全過去が意識の中に復活する記憶の純粹持続である。リリー・プリスコは十年来中断していた絵のなかにそのヴィジョンを捉え、ついにラムジー夫人を再生させることに成功する。

記憶と忘却は昼と夜のように表裏一体の様相を持っている。忘却の彼方に消えるものと、瞬時に過去が蘇える鮮明な記憶は時空を超える自由さがある。

#### 5．物質の崩壊

見捨てられ、忘れられたこの夏の別荘は風が吹きすさみ、荒れ狂う海からの風を受けて崩壊の様相を呈している。時間の経過は物質の風化と衰退を進行させる。

かつての別荘のにぎわい、子供達のざわめく声、テーブルやドア、ボタンなど、それぞれが必要とされ存在価値があり生命がみなぎっていたものである。

So with the house empty and the doors locked and the mattresses rolled round, those stray airs, advance guards of great armies, blustered in, brushed bare boards, nibbled and fanned, met nothing in bedroom or drawing-room that wholly resisted them but only hangings that flapped, wood that creaked, the bare legs of tables, saucepans and china already furred, tarnished, cracked. What people had shed and left - a pair of shoes, a shooting cap, some faded skirts and coats in wardrobes - those alone kept the human shape and in the emptiness indicated how once they were filled and animated; how once hands were busy with hooks and buttons; how once the looking-glass had held a face; had held a world hollowed out in which a figure turned, a hand flashed, the door opened, in came children rushing and tumbling; and went out again. Now, day after day, light turned, like a flower reflected in water, its clear image on the wall opposite. Only the shadows of the trees, flourishing in the wind, made obeisance on the wall, and for a moment darkened the pool in which light reflected itself; or birds, flying, made a soft spot flutter slowly across the bedroom floor. (Ibid., p 140-141)

(それで、家はがらんどろ、ドアは鍵がかかり、敷物はまき上げられ、それら、さまよえる風たちが、大軍の前衛をつとめて乱入した。はだかの板壁をこすり、噛り、あおりたてた、寝室でも、客間でも、風たちに全面的に抵抗するものは何もなく、ただ壁紙がハタハタとはためき、木材がきしみ、テーブルのむきだしの

脚はかびを出し、ソース鍋はさび、瀬戸物はひびわれた。人々が脱ぎすてて、置きざりにしたもの、一足の靴に、烏打帽、衣裳戸棚の中の色褪せたスカートや上衣、それらだけが、人間の形をのこし、その空虚さが、一度はそれらがみたされて、生命を与えられていたかを示し、いかにみんなの手がフックやボタンをせわしくいじったかを思い出させた。かつては、その鏡が顔をうつし、或る時は堀りぬかれた世界をそこに現出して、人影が振り向き、手がふられ、ドアがあき、子供らがとびこみ、ころげまわり、また出て行く、といった光景をうつし出した。今は、くる日もくる日も、日の光が、まるで水にかけをうつす花のように、その澄んだ象<sup>かたち</sup>を、向い側の壁におとした。)

(Ibid., p.170)

かつてのラムゼイ家での晚餐の賑わいがマクナブ老婆によって、過去の生命力に溢れた別荘と現在の衰退した様子が対比して語られていく。

It might well be, said Mrs. McNab, wantoning on with her memories; they had friends in eastern countries; gentlemen staying there, ladies in evening dress; she had seen them once through the dining-room door all sitting at dinner. Twenty she dared say in all their jewellery, and she asked to stay help wash up, might be till after midnight.

Ah, said Mrs. Bast, they'd find it changed. She leant out of the window. (Ibid., p.153)

(マクナブ老婆は、自分の追憶をもてあそびながら、言った。お友だちで東洋に行っておられる人もあったからね。紳士方がお泊りで、ご婦人方はイヴニング・ドレスを着てね。一度、食堂のドアのすき間から、晚餐に坐っているのを見たことがあるよ、二十人はたしかだった、みんな宝石をつけて。皿洗いの手伝いをたのまれてね、真夜中すぎまでかかったかも知れないよ。

やれ、まあ、バスト婆さんは言った、変りはてたとお思いだろう、窓からのり出した。)(Ibid., p.186)

Thinking no harm, for the family would not come, never again, some said, and the house would be sold at Michaelmas perhaps, Mrs. McNab stooped and picked a bunch of flowers to take home with her. She laid them on the table while she dusted. She was fond of flowers. It was a pity to let them waste. Suppose the house were sold (she stood arms akimbo in front of the looking-glass) it would want seeing to – it would. There it had stood all these years without a soul in it. The books and things were mouldy, for, what with the war and help being hard to get, the house had not been cleaned as she could have wished. It was beyond one person's strength to get it straight now. She was too old. Her legs pained her. All those books needed to be laid out on the grass in the sun; there was plaster fallen in the hall; the rain-pipe had blocked over the study window and let the water in; the carpet was ruined quite. But people should come themselves; they should have sent somebody down to see. For there were clothes in the cupboards; they had left clothes in all the bedrooms. What was she to do with them? They had the moth in them - Mrs. Ramsay's things. Poor lady! She would never want *them* again. She was dead, they said; years ago, in London. (Ibid., p.147-148)

(この家族はもう帰って来ない、全然帰ってこないだろうという人もある。家は多分ミクマスには売られるだろうという。それなら構うこともあるまいと、マクナブ夫人は腰をかがめて、家にもち帰るよう、花を一束つみとった。ちりを払う間、テーブルの上にそれをおいた。老婆は花が好きだった。むだにして仕舞うのはいかにも残念。家が売られるとなると(鏡の前に、手を腰にあて、肘をはって立った)、よく面倒を見て



おかなくてはいけないだろう。この長年、人っ子一人はいらなかったのだから。本も何もかも、かびが生えていることだろう。戦争があったり、お手伝いが中々なかったりで、私の望み通りに、家をきれいにしておくことも出来なかった。とても一人の力では、きちんとすることなど出来はしない。年をとりすぎて、脚は痛むし。あの書物はすっかり芝生の上にならべて、日にあてなくては。玄関では漆喰がおちているし、書斎の窓の上の樋がつまってしまって、水が入ってくる。敷物もほとんど使いものにならない。だけど、家の人が来てみなければ、さもなければ誰かをよこしてよく見てくれなければね。戸棚には衣服が一ぱい、どの寝室にも衣服はそのままなのだから。何ともしようがないじゃあないの。きっと虫はついていだろうしさ。あの奥さんの持物にさ。お気の毒に！もう二度とふたたびこんなものはいらないだろう。お亡くなりになったって話だね。もう幾年かまえに、ロンドンでさ。) (Ibid., P.179-180)

マクナブ老婆の語りによって消失した人々が蘇えってくる。リリーが絵を完成してラムゼイ夫人を再生させるまで、亡き人が愛した持ち物を示しながら夫人の性格や存在を我々読者に喚起させる。

Why the dressing-table drawers were full of things (she pulled them open), handkerchiefs, bits of ribbon. Yes, she could see Mrs. Ramsay as she came up the drive with the washing. 'Good-evening, Mrs. McNab,' she would say. She had a pleasant way with her. The girls all liked her. But dear, many things had changed since then (she shut the drawer); many families had lost their dearest. So she was dead; and Mr. Andrew killed; and Miss Prue dead too, they said, with her first baby; but every one had lost some one these years. Prices had gone up shamefully, and didn't come down again neither. She could well remember her in her grey cloak. (Ibid., p.148-149)

(化粧台の抽出しに物が一ぱい(抽出しをひっぱりあけてみた), ハンカチやら, リボンの切れはしやら, そうよ, 洗濯物をかかえて, 車まわしをのぼって来ながらみた, 奥さんのすがたが眼に浮ぶようだ。

「今晚は, マクナブさん」といつも言われた。とても私にやさしくして下さった。お譲さんたちも私のことを好いてくれてさ。でも, いやなことだ, いろんなことがあの時からかわってしまった(彼女は抽出しを閉じた) あそこでも, ここでも, 身内で一番大切な人を死なせたりして。それで, 奥さんは亡くなられる。アンドリューさんは戦死。ブルー嬢さんも, 最初の赤ちゃんのお産でなくなれたそうさ。がこの節は誰でもだれかを亡くしているのよ。物価はあきれはてた上りよう, もう, もと通りにさがることもあるまいよ。灰色の上衣を着た奥さんをよく覚えているよ。) (Ibid., P.180)

And rats in all the attics. The rain came in. But they never sent; never came. Some of the locks had gone, so the doors banged. She didn't like to be up here at dusk alone neither. It was too much for one woman, too much, too much. She creaked, she moaned. She banged the door. She turned the key in the lock, and left the house shut up, locked, alone. (Ibid., p.149)

(屋根部屋のいたるところに, ねずみがいるし。雨は降りこむ。それなのに誰もよこさないし, 誰も来ない。ドアの錠もいくつかとれてしまい, ぱたん, ぱたんとおおられている。日暮れ方に, たった一人でここにいるのは, とてもいやなことだよ。女一人にとっても出来ない, 荷がかちすぎる。とても。骨がぎしぎしと鳴り,

うめき声が出た。ドアをぱたんとしめて、鍵を錠の中でまわして家を去った。戸締りをして、鍵をかけて、たった一人で。) (Ibid., p.181)

風化にさらされ廃居のようになった別荘を描写する。雑草が生え、自然にダリアが咲きラムゼイ夫人の持ち物だったショールが、彼女亡きあとも夫人の存在の証しのように風に揺れている。

The house was left; the house was deserted. It was left like a shell on a sandhill to fill with dry salt grains now that life had left it. The long night seemed to have set in; the trifling airs, nibbling, the clammy breaths, fumbling, seemed to have triumphed. The saucepan had rusted and the mat decayed. Toads had nosed their way in. Idly, aimlessly, the swaying shawl swung to and fro. A thistle thrust itself between the tiles in the larder. The swallows nested in the drawing-room; the floor was strewn with straw; the plaster fell in shovelfuls; rafters were laid bare; rats carried off this and that to gnaw behind the wainscots.

Tortoise-shell butterflies burst from the chrysalis and pattered their life out on the window-pane. Poppies sowed themselves among the dahlias; the lawn waved with long grass; giant artichokes towered among roses; a fringed carnation flowered among the cabbages; while the gentle tapping of a weed at the window had become, on winters' nights, a drumming from sturdy trees and thorned briars which made the whole room green in summer. (Ibid., P.149-150)

(家はのこされた。家は見捨てられた。砂丘の上に貝がらのように残された。生命がそれを見捨てた時、乾いた塩粒がそれをみたすのである。永い夜がはじまったようであった。ふざけあっている風たちはそこ、ここを嚙り歩き、しめっぽい海の息は、いじり廻って、全く家を征服したように見えた。ソース鍋は錆び、マットはくさった。ひき蛙はのっそりと這入りこんだ。ゆらり、ゆらりと、あてどもなく、ショールは左右に揺れていた。あざみは、食料室のタイルの間から、くびを出した。燕は客間に巣をかけ、<sup>とこ</sup>床の上に糞くずをちらした。漆喰はショベルですくい出すほどおちていて、たるきがむき出しになった。ねずみは羽目板のかけで嚙るために、あれや、これやを運んでいった。べっ甲蝶はさなぎから出て、窓硝子の上にバタバタとはためいて、命を終った。ひなげしはダリアの間に、ひとり生えをし、芝生は草が生いしげって波をうった。朝鮮あざみは、巨大な姿を薔薇の間に聳えたたした。ふちどりの撫子は、キャベツ畑に花を咲かし、かつては草が窓をやさしくたたいたものだが、今では、夏の間は室中を緑にするほどの、頑丈な樹々の枝、とげのある茨が冬の夜に太鼓のようなすさまじい音をたてるのであった。) (Ibid., p.182)

For now had come that moment, that hesitation when dawn trembles and night pauses, when if a feather alight in the scale it will be weighed down. One feather, and the house, sinking, falling, would have turned and pitched downwards to the depths of darkness. (Ibid., p.151)

(今や、あの瞬間が来ているのだ、夜明けがふるえ、夜がしばし休止するあのためらいのあの時が、もし羽毛ひとひらが<sup>はかり</sup>秤にのれば、忽ちに平衡がくずれる瞬間が来ているのだ。羽毛ひとひらで、傾き、倒れかかっているこの家が、転覆して、闇の底へと、まっさかさまにおちてゆくであろう。) (Ibid., p.183)

If the feather had fallen, if it had tipped the scale downwards, the whole house would have plunged to the depths to lie upon the sands of oblivion. But there was a force working; (Ibid., p.151)

(もし羽毛がおちて、秤皿が下にさがり平衡を失ったなら、家はことごとく、地底にくずれおちて、忘却の砂原に横たわることとなったろう。しかし、ある力が動いていた。) (Ibid., p.184)

## 6. 円環 知覚から記憶の中に甦る原風景

原風景とは、我々人間がもの心つき初めてから五感で知覚したものが我々の脳裏に深くきざまれ、終生、我々の記憶の中に甦り、我々の一生を決定するものである。

ウルフやブルーストは特に作家として彼らの中に深く内在する心象風景を、各々の表現方法を駆使して、この原風景を甦らせ再生させる。作家が一つの「円環」として、復活させ再生させるのは、まさに幼少の頃のこの原風景に他ならない。ウルフの死後出版された『存在の瞬間』のなかで、セント・アイヴズの幼少時代に体験した「考えられる限り純粋な恍惚感」について次のように述べている。

もし私が画家だったら、これらの最初の印象を、淡い黄色、銀色、緑色で描いたことであろう。淡い黄色のブラインド、緑色の海、銀色のとけいそうがあった。私は球形の、半透明の絵を描くだろう。そりかえった花びら、貝殻、半透明だったさまざまなものの絵を描くだろう。そりかえった形を光が中をとおってくるのを示すが、明確な輪郭をつけずに描くだろう。あらゆるものは大きく、ぼんやりしていて、目で見えるものは、同時に耳に聞こえることになる。音はこの花びら、あるいはこの葉をとおして聞こえてくるのだ。視覚と区別し難い音が、音と視覚とは、これらの最初の印象の等しい部分をなしにしているように思われる。 『存在の時間』 (Ibid., p.100)

ここにウルフが終生親しみ好んだ「淡く」という色彩やイメージのキーワードが理解出来る。これらがウルフの記憶の中に刻みこまれた原風景と感覚印象だと言える。またにび色の海や波の快い旋律、薄日のあいだから射し込む光などウルフが子供時代に体現したすべての知覚や感覚が創作の源泉となっている。

リリーがラムゼイ夫人の幻影を捉えて、ついに絵の中に再生する瞬間を理解するものとして、ウルフの次の文章が参考になる。ウルフは『存在の瞬間』の中で幼少の頃の「啓示」の「瞬間」を挙げている。普段現象の背後に隠れていて見えないリアリティを見る瞬間のことをいう。表面上はばらばらに見える現象を、背後で一つに統一されている瞬間を捉えた瞬間のことである。ウルフはこのような衝撃的な体験を次のように説明している。

それはある秩序の啓示である。あるいは将来啓示となることだろう。それは現象の背後にある何か真実なものしるしである。そして私はそれを言葉で表わすことによって現実のものにしていくのである。私がそれを統一体にするのは、それを言葉で表現することによってのみである。……このことから私は哲学と呼んでよいようなものに到達する。ともかく綿の背後に、ある<sup>パターン</sup>型が隠されているという考えが、私のつねに持ち続けている考えである。そして私たちあらゆる人間の意味だがはこの型と結びつけられていて、世界全体がひとつの芸術作品であり、私たちはその芸術作品の部分なのだという考えである。

(Ibid., p.110-111)

ウルフが彼女の作品の中で追求してきたものは、「現実の背後にある何か真実なもの」に触れた「ヴィジョン」の瞬間を表現することであった。それが彼女の求めていた「リアリティ」であるからである。

ウルフはセント・アイヴズの子供部屋のベッドで、波の律動を聞きながらまどろんでいた時の「想像できるかぎり純粋な恍惚感」について次のように書く。

もしも人生がその上に立っている土台を持っているとしたら、もしも人生は人が満たして満たす器<sup>ボウル</sup>であるとしたら 私の器は疑いもなくこの思い出の上に立っている。それはセント・アイヴズの子供部屋のベッドで半ばまどろみ、半ば目覚めて横たわっていた思い出だ。それは<sup>ワン・トゥ・ワン・トゥ</sup>と波が砕け、浜辺に水しぶきを打ち寄せて、それから、黄色のブラインドの後ろで<sup>ワン・トゥ・ワン・トゥ</sup>と砕ける音を聞いた思い出だ。それは、風がブラインドに吹くと、ブラインドがその小さなどんぐり玉を床の上で引きずって行く音を聞いた思い出だ。それは、横になって、こういう水しぶきの音を聞き、この光を眼にして、私がここにいることはほとんどありえないと感じた思い出、想像できるかぎり純粋な恍惚感に浸った思い出なのだ。

(Ibid., p.98)

ジェームズの幼年期の記憶は愛する母のそばで聞いた波の音や、室内を照らす灯台からの光は幼少の頃の原風景と記憶として心に残っている。これはとりもなおさず作家ウルフにも通じるものである。

ブルーストの『失われた時を求めて』の「円環」法に共通したものを求めるとしたら、それは幼少の頃、身近にいた人々を蘇らせることであり、また深い記憶の底に眠る原風景を呼び起すことにも作家の意図があったのではなからうか。ダロウェイ夫人がパーティで形而上学的な内的瞑想にふけるのと同じく、ラムゼイ夫人も晩餐会の後、階段を上りながら「円環」と思われる場面の描写がある。

Yes, that was done then, accomplished; and as with all things done, become solemn. Now one thought of it, cleared of chatter and emotion, it seemed always to have been, only was shown now, and so being shown struck everything into stability. They would, she thought, going on again, however long they lived, come back to this night; this moon; this wind; this house: and to her too. It flattered her, where she was most susceptible of flattery, to think how, wound about in their hearts, however long they lived she would be woven; and this, and this, and this, she thought, going upstairs, laughing, but affectionately, at the sofa on the landing (her mother's) at the rocking-chair (her father's); at the map of the Hebrides. All that would be revived again in the lives of Paul and Minta; 'the Rayleys' - she tried the new name over; and she felt, with her hand on the nursery door, that community of feeling with other people which emotion gives as if the walls of partition had become so thin that practically (the feeling was one of relief and happiness) it was all one stream, and chairs, tables, maps, were hers, were theirs, it did not matter whose, and Paul and Minta would carry it on when she was dead. (Ibid., p.123)

(そう、晩餐は終わった、成就した。今、感情やおしゃべりをぬきにして、思いおこしてみると、いつもの晩

餐とちがったようにも思えない。ただ、それはたった今すんだばかりなのです。それですんでしまえば、すべては静止の中に投げこまれました。みんなは、どんなに長く生きようとも、きっと今晚のこと、この月のこと、風のこと、家のこと、そうして私のことも、思い出してくれるだろう。そのことは、とても彼女の心を快く、くすぐるものであった、みんなの心に食い入って、みんなが今後、どれほど生きようとも、自分がみんなの生活の中に織り込まれるだろうと考える、この点で彼女は一番お世辞に弱かったのである。二階に上がりながら、彼女は考えた。これも、これも、これもと笑いながらも愛情深く、踊り場にある、ソファー（お母様のかたみ）、揺り椅子（お父様のかたみ）、ヘブリディーズの地図に眼をやりながら。これらすべては、ポールとミンタ、「レイリ家」の生活の中に再びよみがえるであろう。も一度、その新しい姓をくりかえしてみた。そして、子供部屋の扉に手をおきながら、情熱の与えるあの人との感情の交流をひしひしと感じた、人と人とをへだてる壁が非常に薄くなり、実祭には（それは安堵と幸福の感じでした）一つの流れとなってしまうのです。そして椅子も、テーブルも、地図も、すべて彼女のものでありながら、彼らのものでもあり、誰のものだということは問題でないのです、私が死んだ時には、ポールとミンタがそれをひきついでくれるでしょう。）（Ibid., p.148）

三章で荒廃した別荘とラムゼイ夫人の死により、所有者が不在になった衣裳戸棚が描かれ、時間の経過がもたらす残酷さと衰退を読者は見せられが、再びラムゼイ家の人々、リリーやカーマイクル氏などが集い、別荘はまた命を吹き返し、家具や衣裳戸棚の中の一つ一つのもものが、香りや声が亡くなった人の想いでともに蘇ってくる。ここにラムゼイ夫人が一章の晩餐会で言っていた、「みんなは、どんなに長く生きようとも、きっと今晚のこと、この月のこと、風のこと、家のこと、そうして私のことも、思い出してくれるだろう。」という形而上学的な言葉を我々に思い起こさせる。

三部では一部での人物、意識や記憶、言葉が時間の風化と忘却から蘇ってくるものを捉えることであり、10年前と同じ別荘を設定し、燈台行きをついに実行し、リリーが中断していた絵を描き、今や詩人のカーマイクルが詩集を出版し成功し、頑固で気難しかったラムゼイ氏が妻を亡くし老齢な老人になっている姿を見て息子のジェームズが和解しようという気持ちになる。父ラムゼイ氏に対する息子ジェームズの憎悪は、幼い頃から「現実」認識を前提に拒否されてきたが、10年後に初めて父と訪れた燈台の岩の上に立ち、洗濯物を干した殺風景な岩場の塔を見て、厳しい孤高の象徴として存在し続け、思索の道に挫折し父と、妻に先き立たれ老いた姿に初めて父を容認する気持ちになり、「雪と岩の荒野に、父と自分の二組の足跡だけがある」というイメージを思い出し、父と息子として脈々と継承されていくものを感じ和解する。

He had always kept this old symbol of taking a knife and striking his father to the heart. Only now, as he grew older, and sat staring at his father in an impotent rage, it was not him, that old man reading, whom he wanted to kill, but it was the thing that descended on him – without his knowing it perhaps; that fierce sudden black-winged harpy, with its talons and its beak all cold and hard, that struck and struck at you (he could feel the beak on his bare legs, where it had struck when he was a child) and then made off, and there he was again, an old man, very sad, reading his book. (Ibid., p.199-200)

（ナイフをとって父の心臓をつくという、この子供時代からの象徴を、ジェームズはずっと持ちつづけて来た。

彼が大きくなった今、無力な怒りに燃えている父親を凝視していると、自分が殺そうと願うのは彼ではない、本を読んでいる老人ではなくて、自分の上に急に襲いかかって来るもの、多分父はそんな物には気がついていないだろう。あの獐猛な、黒い翼をもったハービー[ギリシャ神話に出る女面の怪物]、冷たくて、かたい爪とくちばしをもち、不意におそいかかり、打って、打って、打ちのめし(ジェイムズは、彼の裸の脚の、子供の時、それに打たれたところに、今でもそのくちばしを感じられるのだった)、やがて、立ち去ってしまい、また、あそこに坐って、老人となって、悲しげに、本を読んでいるのだ。(Ibid., p.244)

They would soon be out of it, Mr. Ramsay was saying to old Macalister; but their children would see some strange things. Macalister said he was seventy-five last March; Mr. Ramsay was seventy-one. (Ibid., p.222)

(わたしたちは、やがて、この世ともおわかれだろうが、ラムゼイ氏はマカリスタ老人に言っていた、子供たちはこれから、色々珍しいことにも出逢うだろうな。マカリスタは今年の三月で七十五歳になったと言った。ラムゼイ氏は七十一歳だった。) (Ibid., p.272)

これら万物は長い年月の風雪を経て変貌していくものであり、その中から継承されるものは連なって円環の中に組み込まれていくのである。ジェイムズが燈台を訪ねて、幼い頃に見ていた燈台と、成長してから現実目に目にした姿とのあまりの異いに愕然として失望する。この視覚の誤差は子供の視点と成長してから見るものの異なることを証明している。これこそまさに父親が息子に主張し続けてきた「リアリティ」なのである。人の亡きあと、リリーの描いた絵がどこに架けられようと、永遠に残っていき、また人間も同じく永遠にその存在の痕跡の証しは継承されていくのである。

She looked at her picture. That would have been his answer, presumably—how ‘you’ and ‘I’ and ‘she’ pass and vanish; nothing stays; all changes; but not words, nor paint. Yet it would be hung in the attics, she thought; it would be rolled up and flung under a sofa; yet even so, even of a picture like that, it was true. One might say, even of this scrawl, not of that actual picture, perhaps, but of what it attempted, that it ‘remained for ever’, she was going to say, (Ibid., p.195)

(私は絵をみつめました。多分つぎの言葉が、きっとあの方の答えであつたらうと思います。「貴女」も「私」も、それから「彼女」もやがては死に、消えてしまう。止まるものはなく、すべては変化する。しかし、言葉は消えてしまわない。絵も消えない。しかし、この絵は屋根部屋にかけられるのではありませんか？きっと。それとも、まき上げて、長椅子の下に投げこまれるのでしょうか。そうだとしたって、こんな絵にしても、あの方の仰言ったことは本当です。このなぐり描き<sup>が</sup>でさえも、また現実に描かれたものでなく、意図され、試みられたものについても、多分、それは「永遠にのこる」といえるのではないかしら。私はそういうつもりでした。) (Ibid., p.238)

[The sea without a stain on it, thought Lily Briscoe, still standing and looking out over the bay. The sea is stretched like silk across the bay. Distance had an extraordinary power; they had been swallowed up in it, she felt, they were gone for ever, they had become part of the nature of things. It was so calm; it was so quiet. The steamer itself had vanished,

but the great scroll of smoke still hung in the air and drooped like a flag mournfully in valediction.] (Ibid., p.204)

〔[しみ一つない海，とリリー・プリスコは，尚，立ち止まって，入江を見渡していた。海は，入江を横切つてまるで絹のようにのびていた。距離というものはすごい力のあるものね。みんなはその中に呑みこまれ，永久に去ってしまったわ，自然の一部になってしまった。非常に穏やかであった。非常に静かであった。汽船も消えた。しかし大きな，煙の渦巻きは，まだ空中にかかり，旗のようにたれさがり，別離を楽しんでいる。]〕 (Ibid., p.249)

So much depends then, thought Lily Briscoe, looking at the sea which had scarcely a stain on it, which was so soft that the sails and the clouds seemed set in its blue, so much depends, she thought, upon distance: whether people are near us or far from us; for her feeling for Mr. Ramsay changed as he sailed further and further across the bay. It seemed to be elongated, stretched out; he seemed to become more and more remote. (Ibid., p.207)

(ほとんどしみ一つない海，たいそう柔らかくて，帆も雲もその青色の中にはめこまれたかのように見える，その海を見ながら，リリー・プリスコは考えた，とても多くのことが距離に影響されることを，人々が自分たちの近くにいるか，それとも遠く離れているかということに関係することがたくさんあることを。というのは，ラムゼイ氏に対するリリーの感情も，彼が入江を横切って遠くへ遠くへと行くにしたがって，変化してきたからである。入江は細長く，ひきのばされたように見え，彼もますます遠のいて行くように思えた。ラムゼイ氏も子供らもあの青色に，あの距離に，呑みこまれたように思われた。) (Ibid., p.254)

ラムゼイ夫人が述べていたように，いまや苦悶も焦燥も混乱も消えてしまい，そして，すべてが合して，この静穏，この安息，この永遠性となってあらわれてくる。また燈台に向かう意識は死のイメージにあふれている。ラムゼイ氏は亡き妻を偲ぶための船旅であり，あたかもリリーにとって地平線の彼方に彼らの船が沈んでいくように思える。それはまた人間の生は深い大海の底にいのちが注ぎこまれていくものであり，そこで，ラムゼイ夫妻のいのち，その子供達，漂流物，すべてが呑み込まれて全体が結合する。死はまた一つの新しい誕生でもある。ウルフが原体験した大海の彼方に万物はのみ込まれていき円周は始点に戻って「円」は閉じるのである。

## 7. 結論

この小説の構成は，一部の「燈台」を中心軸にすえた様々な登場人物や交錯する意識や物質が，二部の10年の歳月という時間経過に濾過され，どれだけ時間の破壊力や風化に耐えて，再生するエネルギーを持ちこたえられるかの試金石となる部分であり，三部にラムゼイ夫人の再生や燈台行きの目的の達成，記憶の蘇りによって「円環」という最終過程に到達するための時間的経過を証明するために，二章は存在する必然性があり，三章は，陸で絵を描くりリーと燈台に船出するラムゼイ家の人々が平行して交互に語られていくのは，ウルフ独特の手法で，ジェイムズに二つの燈台のイメージを持たせるためのウルフの構成上の工夫であり、

これこそまさに、一部での父親の主張する「<sup>リアリティ</sup>現実」の姿を息子に認識させるものであり、ここで三部の最終部で「円環」に導くための、ウルフの周到な小説構成上の技法であったと断言出来るのではないだろうか。

## 註

- 1 . Georges Poulet 「Les métamorphoses du cercle」  
岡 三郎訳, 『円環の変貌』 上, 下巻, 国文社, 1990, 初版
- 2 . Georges Poulet ベルギー生れの文芸批評家, 『人間的時間の研究』, 『ブルースト的空間』などの著がある。
- 3 . Marcel Proust 著 「A la Recherche du Temps Perdu」, Gallimard, 1954  
井上究一郎訳 『失われた時を求めて』, ブルースト全集 10 巻, 「見出された時」, 筑摩書房, 1989

## 引用文献

- 1 . Virginia Woolf, To the Lighthouse, Penguin Classics, Reprinted, 2000, 1-268.
- 2 . 伊吹知勢訳, 『燈台へ』, ヴァージニア・ウルフ コレクション, みすず書房, 1999 初版 .
- 3 . J. シェルキンド編, 出淵敬子, 筒井雪路, 近藤いね子他 訳 『存在の瞬間』, みすず書房, 1983

## 参考文献

- 1 . L.Marcus 「Virginia Woolf」 Writers And Their Work, 2004.
- 2 . Su Reid 「Mrs.Dalloway and To the Lighthouse, Contemporary Critical Essays.
- 3 . 大沢実 「ウルフ研究」 時間と死の芸術, 南雲堂, 1956 再版 .
- 4 . 大沢実 「ヴァージニア・ウルフ」 20 世紀英米文学案内 10, 研究社, 1936 .
- 5 . 坂本公延 「ヴァージニア・ウルフ」, 山口書店, 1980 .
- 6 . 柴田徹士「小説のデザイン」 ヴァージニア・ウルフ研究, 研究社, 1990 .
- 7 . ポール・リクール「時間と物語」, 久米 博訳, 新潮社, 1988 初版 .
- 8 . 野島秀勝「ヴァージニア・ウルフ論」, 南雲堂, 1962 .
- 9 . 宮田恭子 「ウルフの部屋」, みすず書房, 1992 .
- 10 . 吉田安雄 「ヴァージニア・ウルフ論集」 主題と文体, 荒竹出版, 1977 .
- 11 . 吉田良夫「ヴァージニア・ウルフ論」 ヴィジョンと表現, 葦書房, 1991.
- 12 . ロバート・ハンフリー「現代の小説と意識の流れ」石田幸太郎訳, 英宝社, 1970 .